

足立区基本構想審議会 第2回くらし専門部会 会議録

日 時 平成27年9月28日（月曜日） 午前10時から12時

場 所 足立区役所中央館 8階特別会議室

出席者 足立区基本構想審議会 くらし専門部会委員（8名）

石阪督規委員、小久保兼保委員、鈴木健文委員、大塚和夫委員、益留有紀委員、馬場信男委員、たがた直昭委員、おぐら修平委員

事務局：基本構想担当課長、基本構想担当係長、(株)地域計画連合

オブザーバー：地域のちから推進部3名、産業経済部1名、衛生部2名、福祉部3名、環境部1名、政策経営部1名、

議題等 1 人口推計について（報告）

2 第1回くらし専門部会における議論の確認について

3 意見交換※「将来像」及び「将来像を設定した根本となる考え方（基本理念）」の考案

4 事務連絡

資 料 【資料 17】 足立区人口推計

【資料 く⑤】 くらし専門部会 課題整理及び将来像等検討シート

1 人口推計について

基本構想担当課長：定刻になりましたので、ただいまより足立区基本構想審議会第2回くらし専門部会を開催させていただきます。本日はお忙しいところご出席いただきまして誠にありがとうございます。本日のオブザーバー出席ですが、地域のちから推進部・産業経済部・福祉部・衛生部・環境部・政策経営部の職員です。それでは石坂部会長に進行をお願いしたいと存じます。

石坂部会長：皆さんおはようございます。本日は2回目の会議になりますが、どうぞよろしくお願いいたします。それでは早速審議に入りたいと思いますが、まず、配付資料の確認を事務局からお願いします。

基本構想担当課長：事務局から本日の配付資料の有無を確認させていただきます。最初に本日の次第です。続きまして資料17、足立区人口推計です。38ページございます。続きまして資料番号はございませんが、足立区基本構想審議会第2回くらし専門部会追加資料というものです。続きましてA3版の資料く⑤と表示のくらし専門部会課題整理及び将来像等検討シートです。その前に資料番号はございません。A3版の第1回くらし専門部会のまとめがございます。今のくらし専門部会のまとめは、前回のホワイトボードをまとめたものでございます。同じくA3版の資料く⑤のものは、前回お配りしたものの内容更新をしたものです。最後に前回の会議録についてですが、本日は間に合いませんでした。大変申し訳ありませんが、本日のところは先ほどの資料く⑤の内容を持って代えさせていただきます。会議録は次回に配付させていただきますと存じます。以上、ご不足はございませんか。以上です。

石坂部会長：それでは早速次第に沿って進めていきたいと思います。まず、1、人口推計について報告とあります。これについて資料の報告を事務局からお願いします。

基本構想担当課長：それでは資料17、足立区の人口推計をごらんください。まず、表紙を1枚めくっていただきまして3ページ目です。人口推計の実施目的について挙げておりますが、(1)の基本構想の策定にあたっての基礎資料とあります通り、この審議会でご議論いただく上で活用していただきたいと存じます。その他にも区の方で基本計画や地方人口ビジョンを策定するための基礎資料として活用してまいります。

次に4ページ、5ページをごらんください。推計の方法について表にいたしました。例えば人口の自然増減について、生残率という現在居住する方が1年後に何人ご存命かとか、出生率がどのぐらいかなどの計算は、国の研究所が示した数値等を用いております。足立区は日本全体的場合と同じく、自然減の状況です。一方、人口の社会増減については、表の下から2行目の項目。移動率で町丁目ごとに転出入実績の推移を

元に推計しました。ただし、移動率については足立区の場合、ここ最近での転入超過が著しく、大きな調整が必要でした。まず、拠点開発や大型マンション建設等があった地域は、大きな転入実績があったわけですが、建設等が終わった後は、それまでの転入実績で計算し続けることは出来ません。逆に、表の一番下の項目。将来の開発動向の通り、千住大橋駅付近や六町などのように開発が継続している地域。それから千住1丁目のなどのように予定がある地域は、転入者数や期間を個別に推測して推計しました。これらの調整の関係で、人口推計の報告が本日まで遅れてしまいましたことをお詫びさせていただきます。

個別の開発動向については、恐れ入りますが、12 ページ、13 ページをごらんください。ここから以後は、エリアデザインの7地区などを中心に、主な転入・転出の推計方法を記載しました。ごらんのページは千住地区についてです。13 ページの表における低位推計・中位推計・高位推計とは、転出入の人数を大きく見込むか小さく見込むかということになります。この表の場合は、千住橋戸町等における建設予定の内容が明らかですので、低位・中位・高位共に同じ見込み数です。14 ページの北綾瀬付近では、千代田線の利便性向上による開発が予想されますが、具体的な建設予定が現時点ではないため、低位・中位・高位と異なる転入者数を見込みました。以後、15 ページの竹ノ塚駅周辺、16 ページの六町駅周辺、17 ページの花畑地区、18 ページの江北地区、19 ページの綾瀬地区や西新井・梅島地区です。

次の20 ページ、21 ページは、都営住宅やUR住宅についての個別調整内容です。特に都営住宅については、建て替えなどにより空地が生じる場合に、民間住宅が建つことも転入として想定しております。なお、ここまでは社会増減の説明でして、これに自然増減の推計値を合算したものが地域ごとの人口推計となります。開発規模によっては、合計で人口が減少する地域もございます。

続きまして26 ページをごらんください。足立区の総人口における推計結果です。表で開発による影響を最大に見込んだ高位推計と、中間的な中位推計、最小の低位推計の三つで示しました。中位推計で見ますと、平成32年、東京オリンピックの年が人口のピークで、68万2,000人強。今年の1月より約8,000人以上増えます。つまり、数年間は開発等による転入超過となります。その後は自然減が上回って減少を続け、表の水色で示した平成58年、新基本構想の期間を30年間とした場合の最終年となりますが、こちらでは61万2,000人強となります。

次に28 ページをごらんください。総人口のうちの65歳以上の方についてです。こちらは平成60年ぐらいのピークまで増え続けます。29 ページは65歳以上の方の割合ですが、今年の24.2%がいずれ35%以上。つまり、3人に1人以上となります。グラフでは平成30年ぐらいから横ばいになっていますが、これは足立区で比較的人口が少ない現在50歳代の方が、年齢65歳に到達する時期は自然減と拮抗するためです。その後、比較的人口の多い40代の方が、年齢65歳に到達して、再び伸び始めます。高齢化の進展については、地方に比べれば比較的遅いですが、23区の中では早い方ですので、他区に先駆けての対策が必要だと言えます。次に30 ページ、31 ページ

ジは、75 歳以上の方についてです。グラフで一時減少するのは、これも比較的人口が少ない、現在 50 歳代の方の影響です。次に 32 ページ、33 ページは、85 歳以上の方についてです。要介護の方も増えていくと予想されます。

続きまして 34 ページの生産年齢者数です。中位推計では、平成 37 年度までほぼ横ばいですが、想定される開発動向がなくなって、転入が少なくなると、65 歳に到達する人口との差し引きで減少し続ける状況です。なお、仮の話になりますが、現在は想定出来ない鉄道新線や新たな開発等が打ち出されたり、足立区の魅力がさらに大きく向上した場合には、生産年齢者や総人口の減少を若干緩やかにする可能性もあります。次に 36 ページ、14 歳以下の年少者数についてです。こちらはこれまでも微減してきた流れのまま減少を続けていきます。なお、外国人についてですが、ページを戻っていただきまして、7 ページをごらんください。青い折れ線グラフがこれまでの推移です。平成 23 年まで増加してきたのが、東日本大震災の後減少しました。平成 26 年から再び増加に転じましたが、そのペースは以前より急激になっているのが特徴です。以上です。

石阪部会長：人口推計についてご説明をいただきました。質問はありませんか。1 点私から。もともとこれ社人研が出した推計ではかなり下に落ち込むと言われていますが、今回出された推計というのは、低位推計にしてもかなり高い水準になっていますが、6 ページに書いてある震災の影響を省いたということであったり、大規模な開発がその後見られたという点で、当初の社人研の推計よりもかなり高い見通しとなったということでしょうか。

基本構想担当課長：社人研は 38 ページで、私は説明をしましたが、青い長い点で結んだようなもの。平成 22 年から下降していくという推計をいただいておりますが、足立区はその後西新井とか千住大橋等開発がございまして、これとは逆に増えてまいりました。ただ、部会長がおっしゃった通り、6 ページは平成 25 年度も足立区は人口推計を行いまして。ただその時は東日本大震災で特に外国人の方が転出されたと、そのあたりも今後の伸びに、推計に影響しまして、横ばい、いずれ減少ということでしたが、当時は東日本大震災の影響がどこまで続くか。どの程度のものかというのは全く見えない中での推計でしたが、3～4 年たちましたらまた人口が伸び始めてきたということで、社人研とも、また前回の 25 年度に足立区がやった人口推計とも乖離が出たというところでございます。

石阪部会長：ありがとうございます。他にいかがでしょうか。よろしいでしょうか。またこれを踏まえて、今後の議論に役立てていただければと思います。

2 第 1 回くらし専門部会における議論の確認について

石阪部会長：それでは次第２、第１回のくらし専門部会における議論の確認についてですが、資料について事務局から説明をいただきます。

基本構想担当課長：まず、資料番号のない足立区基本構想審議会第２回くらし専門部会追加資料をごらんください。Ａ４のものです。これは前回の専門部会で、区が今年度の事業計画等を進めていく上で問題となっている点をお示しした追加分となっております。２番目の問題点についての項目を見ますと、低所得者施策・高齢者施策・障がい者施策・児童施策を挙げさせていただきました。後ほどご活用いただければと存じます。

続きましてＡ３版の資料く⑤と表示のくらし専門部会課題整理及び将来像等検討シートと、資料番号のないＡ３版の第１回くらし専門部会のまとめをご用意ください。前回、現状と将来の課題について意見交換をしていただいた内容を元に、論点等を整理し、部会としての将来像や基本理念の考案に向けたまとめの案をたたき台としてお示しするものです。修正や補足等の討議を本日と第３回まで重ねながら固めていっていただきたいと存じます。なお、内容については株式会社地域計画連合より説明をさせていただきます。

地域計画連合：では前方のホワイトボードから前回の振り返りをさせていただきます。よろしくお願いいたします。こちらは前回使いました模造紙そのままになります。前回出た話題としては、まず、一つ健康づくりというところが大きく議論になりました。またもう一点、新たなコミュニティが必要ではないか。そういったところも大きな議論になったかと思います。あともう一点、扶助費の削減・抑制に向けて、例えば在宅介護・生活保護、こういったところの担い手をどうするかとか、そういったところも議論の論点になっておりました。それ以外にも、例えば地産地消や若者向けのまちのあり方。あとは中退支援、あとはスポーツ。足立区を挙げてのスポーツなど、そういったどこに足立区の売りを置くか、そういったことがこちらの部会では議論になったかと思います。

これを踏まえまして、皆さんのお手元にあるカラーの資料をごらんください。こちらがそちらになりますが。これはこの模造紙の中に書いてあるものをほぼ忠実にそのまま再現しておりますが、今後まとめていくにあたって少し配置を変えて、大きく視点が見えるように整理し直したものでございます。水色の楕円で囲っているところが、その視点と言いますか、そういったものを整理しています。まず、真ん中に、足立区のイメージを誰にどのように発信するか。例えばこちらでは、高齢者が住みやすいまちはイメージアップにつながるかなどのご意見もございました。若者に向けてどう発信していくかとか、地産地消・スポーツ・治安など、足立区の売りをどこにするか。そういった議論がこちらになってきます。左の方に、足立らしい多様なコミュニティが生まれるという楕円がございます。こちらはコミュニティ、これから新旧の住民たちがどのようなコミュニティを作っていくかとか、町会・自治会に縛られないコミュ

ニティのあり方。そういったものがこちらで議論されました。新しいコミュニティをどう作っていくかという話の中で、例えば親世代との同居とか、孤立を防止するための支え合い、そういった議論もございました。

もう一方右手の方に、将来にわたって健康でいきいきと活躍出来るという水色の楕円がございます。こちらはもう一つのキーワードであった健康のところですが、こちらは高齢者がこれから増えていく中で、高齢者向けの環境整備や活躍の場の用意、そういったものを含めて一人ひとりが健康でいられる、そういった取り組みが必要だという視点は多く議論されています。あとは右下になりますが、一人ひとりが尊重され豊かに生きられる。これはいろいろな視点を混ぜてしまったのですが、例えば障がい者の方に目を向けた施策展開が重要であるとか、あとは在宅介護や生活保護、それぞれの状況に応じた支援、支え合いといったお話がございました。また、外国人が多いこと。あとは学力の低いことが課題になっていることなどから、そういったところの中途退学とか、そういったところのサポートも必要。そういったご意見がございます。

まとめを文章化したものが資料のく⑤になります。左側のくらし専門部会の課題という枠の中に6点、黒い四角で示しておりますが、6点整理をいたしました。まず、1点目が既存のコミュニティに加え、新たなコミュニティや絆づくりが求められている。2点目が、一人ひとりが担い手となり、互いに支え合える関係づくりが求められている。3点目が、一人ひとりが意識しながら健康づくりに取り組むことが求められている。4点目が、必要な支援を受けながら誰もが地域で安心して暮らせることが求められている。5点目が少し視点が変わりますが、足立産のものを足立で消費出来る仕組みが求められている。最後になりますが、新たな足立のイメージを発信していくことが求められている。こういった形で事務局でいったんまとめさせていただきました。また二重線の下に、他の専門部会からのご提案として議論が挙がったものをご紹介します。まちづくり専門部会からは、マンションの開発段階から町会や自治会の加入のルールづくりが必要ということで、こちらの部会でもコミュニティの議論が挙がりました。また子どもの専門部会の方からは、子どもの貧困ということで、一人親家庭への対応、職業訓練や福祉のあり方なども、くらし部会でもぜひ検討していただきたいという意見をいただいています。

これをベースに右側に足立区の将来像、あるべき姿というものがございますが、5点ほどたたき台として今回ご用意させていただきました。こちらで使っているキーワードは、前回皆さんの議論の中でいただいたものをベースにさせていただいております。今日はこちらを深めていただく形で進めていただければと思います。以上です。

石阪部会長：ありがとうございます。ご質問はございませんか。出たものをもう少し分かりやすくまとめていただいて、水色の丸で囲んだところはコミュニティの話題であったり発信の話題。それから健康。そしてさまざまな豊かに生きるための四つのこういった丸を作っていただいたと。さらに、併せて資料5では、六つの四角にまとめていただいたと。改めて少し整理をすると、皆さん、僕の印象だとかなりこれ前回の

印象ですが、生涯にわたって健康でいきいきと活躍が出来る。簡単に言うと、高齢者。高齢になっても豊かにいきいきと暮らせるようなまちという意見は皆さん共有されていたのかなと。それからコミュニティに対する課題というののもいっぱい出てきて、このままだとかなり厳しいなど。新たな絆づくりが求められているというところもかなり意見として出たのではないかと。さらに皆さんから出たものとしては、その他いろいろですね。介護の問題。それから農業の問題も出ましたし、それからイメージですね。それから若者の支援であったり、生活困窮者・生活保護の問題、学力の問題、こういったものも出てきました。

で、今日は前回皆さんに意見を出してもらったので、資料5で言うと足立区の将来像と書いてあるところ。ここにキーワードを挙げていただいて、足立区が遠い将来ですが、どんな将来であってほしいのか、あるべきなのか、これについて皆さんと一緒にまとめていきたいと思います。ここに五つ挙がっていますが、これは案としてですね。

地域計画連合：この中に入っています。

石阪部会長：少し読み上げてみると、キーワードとして足立らしい多様なコミュニティが生まれるまち。資料5の右側の上の方ですね。それから人の力、人の良さを生かすまち。生涯にわたって健康でいきいきと活躍出来るまち。一人ひとりが尊重され豊かに生きられるまち。低所得でも豊かに住めるまちとなっています。一つに絞る必要はないと思いますが、複数このようなまちであってほしいという将来像を今日は少し出してもらいたいと思います。

ただ、いきなり将来像を出してくれと言われても多分難しいと思いますので、まずはどんなことが、例えば10年とか20年、もっと言えば30年先に足立区がこんなまちになっていてほしいなど。こんなまちであるべきだということを皆さんに出していただきたい。今日は。前は課題が中心でしたが、今回はこのようなまちであってほしいというところを皆さんから一言ずつまずは挙げていただいて、もし具体的に挙げるのが難しければ、ここのところは自分は同調するとか、これは強調しておいた方がよいというところを出してください。それがいろいろ出てきたところで、また皆さんと一緒に議論をして、まとめていきたいと思います。よろしいでしょうか。今説明がいろいろありましたが、いくつかの論点は多分あると思うのですが、まず、皆さんが一番大事だと思うところ。将来これが足立区として大事だと。なかなか先のことをイメージするのは難しいのですが、皆さんおそらく世代・性別も違う方で、いろいろな多分考え方・思いがあると思いますから、それを伺っていききたいと思います。

3 意見交換

石阪部会長：ここから意見交換を進めていきたいと思います。もし分からないことや

質問等ありましたら、事務局等に伺ってみたいとも思います。まずはではどんなキーワードで足立区の将来を語るのがよいのかというところを皆さんに伺ってみたいと思います。どうでしょうか。

馬場委員：やはり足立区に住んで良かったなと、安心して住んでいられるなということの基本は、やはりコミュニティが深いかどうかが一番気になると思います。近所にどのような人がいるか分からなければ、やはりマンション住まいの人は、関心がない人は集合住宅に入るケースもあるとは思いますが、足立区の一つの売りはやはり下町コミュニティがしっかりしているということですから、これは誇るべきものであるし、特徴として伸ばしていかなければいけないと思っています。

コミュニティを深める、広げる一番の機会は地域のお祭りが挙げられると思います。学校にしろ、学校と地域のつながりを作るには、やはり運動会とか文化祭とか発表会、それで交流が深まっていくわけですし、地域の住民同士であればやはりバザーであるとか、盆踊りであるとか、神社のお祭り、住区センターのお祭り、イベント・行事をきっかけにして交流が深まると思うのです。

これは僕の持論なのですが、例えば盆踊りでも神社のお祭りでも、それに集まってくれる人はよいのですが、そこから先の広がりがなかなか難しいということです。ですから、それをどう解決していくか、これは僕の一つの持論なのですが、盆踊りでもお祝いを持っていった人はテントの中で1杯飲めるという、寄付・奉仕という制度があります。町会主催の行事でもそうですが、これだと限られた人しかお祝いを持っていかないのが通例なのです。昔は別に住民が少なかったから、ほとんどの近所の人の顔が分かったのですが、今は多くの方が、これだけ多くの住民を抱える自治体になりましたから、交流をするためのお祭りであれば、もっと気軽にお茶が飲めたり、酒を酌み交わせたり出来なければいけないのが祭りだと思います。

ですから、お祝いを持っていかずとも座れて、お茶ぐらいは飲めるようにしないと、次の一手にはならないと思います。昔からのお祭りの延長で終わってしまって、その挙げ句に町会の加入者が少ないとか、誰が住んでいるのか分からないということでは、少し打つ手が足りないと思います。やはりこのコミュニティを広げるということになると、やはりお祭りをもっといろいろな若い人とか、転入してきてすぐの人の意見などをどんどん吸い上げていく努力が必要になるだろうと思います。

石阪部会長：お祭りの話ですが、まさにそうです。人口動態を見ていっても、若い人が1割を切るわけです、このままでは年少人口が。そうなってくると、子どもも少ない中で高齢者が増えていく。今まで通りのやり方でお祭りをやっていると、おそらくじり貧になっていくだろうと。自治会とか町会にしても、加入率が伸び悩む中で、新しい人がどんどん入ってくる。そうした人たちも巻き込んで新たなコミュニティ。もっと言えばお祭りであつたり活動に結び付けていくような仕掛けがもしこのまま何もないと、多分足立区って住みにくいまちになっていくだろうなと。せっかく来た

のに全然面白くないと思うのではないのでしょうか。来てみて地元の人ばかりがただ楽しんでいて、お金を持っていった人だけがテントでお酒を飲めて、そうではない人は邪陰に扱われるようなことがもしあったとしたら、それはやはりつまらないだろうと。足立区というのはいろいろな人が入って、出てまた入ってと。しかも入る人がどんどん増えていくことを期待したいという以上は、やはり新たなコミュニティを構築していくことが大事で。だからこれで言うと、足立らしい対話のコミュニティが生まれる、まさに足立を作っていくって、10年後には既存の自治会や町会に加えて、新しいいろいろな動きがエリアで出てきているなど。このようなまちであってほしいという思いが皆さん多分あるのではないかと思います。それだけ逆に言えば今のコミュニティというのがかなり弱くなってきているとか、あるいは特定の方だけでコミュニティを維持していて、残り的人たちは全くそれに加わることが出来ない。あるいは加わっていない状況になっていると。馬場さん、そういった面はありますか。マンションや新しく入ってきた人がなかなか行事に加わらないということとか。

馬場委員：先ほど他の部会からの提案で、マンションが出来たら町会・自治会の加入のルールを作るというのがありましたが、ルールを作ればしっかりと新しい住民も地域自治に参加してもらえるように努力していくべきだと思うのですが、既存のやり方だとそれはうまく行くかどうかは不安で。

石阪部会長：強制ですよ。そうではなくて、やはり入りたいという魅力があって初めて入ってもらえるということなので、単にルールだけを整備して自治会に入れというだけではなくて、きちんとその辺も魅力的な町会・自治会を併せて作っていく努力をしていく必要があるのかなと。

馬場委員：ですからお祭り・盆踊りで、お金を出す人が地域のコミュニティのためにという意識で出してもらって、それ以外の人がお菓子とお茶とかビールでも飲めるようにしていくのがコミュニティを深くする方法だと思います。最近四国のお遍路のおもてなしとか、日本はおもてなしする文化があると言われるのですが、やはり初めて足立区に来た人に対してのおもてなしの精神というのをもっとみんなで考えるようにしてほしいと思います。

石阪部会長：盆踊り自体が少なくなっているのですか。

馬場委員：比較的多いと思いますが、結構担い手が少なくなったりしていますが、まだ小学校とか公園とか開催出来る場所がありますから、そうしたよいきっかけが材料として資源があるわけですから、それをうまく利用して。

石阪部会長：足立区はお祭りがたくさんあるイメージがあるのですが。盆踊りだけで

はなく、大規模ないろいろなお祭りが定期的にやられているイメージがあるのですが、そのあたりとうまく融合して、例えばNPOとか市民団体はまた別になんていう話ではなくて、何か連携が出来てやるような仕掛けがあるとよいと思いますね。この辺はだからある程度コミュニティの再構築を行っていくことなのかなと思います。他にコミュニティについてありませんか。

たがた委員：キーワードは確かにコミュニティというのは当然その一つに一番なると思うし、そのコミュニティをどうやって枝分かれにして、そこでそれぞれのコアの部分を作っていくかだと思うのですが。例えばこのA3の表を見ると、結構どちらかというと高齢者対策とか健康づくりとかが多くて、私も前回むしろ高齢者の環境整備ということで出させていただいたのですが、これは非常に大事なのですが、それも大事だし、もう一つ大事なのはこれに対しての若者。例えば今の10代の人が、30年後は40代になります。40代になると、やはり足立区を背負って立つ人間だと思いますので、このような方々のこれからの対策というのがやはり考えなければいけないのですが、ただ先ほど馬場さんが言ったように、例えばお祭りとか各地域で子どもたちに太鼓を叩かせたり、いろいろなイベントの工夫もしています。また、10月には結構町会でも子ども会の運動会が結構開催されるのですが、ここ数年は子ども会の運動会と言うよりも、むしろ子どもの方が全然少なくて、大人の方が役員だから多いといった状況になっております。

またこれ以外でも、あるいは別な施策ですが、今足立区は学校選択制になっておりますので、今までは自分の地域の子どもがこっちの自分の学校に行っていたのですが、それが選択出来ることによって、他地域の子どもも入ってくるということで、なかなか地域と大人と子どものコミュニケーションが取れないという部分もあって、その辺は非常に感慨深いものがあるのですが。やはりこれからの若者対策、ここをどのように、若者対策イコール若者とのコミュニケーションという部分をやはりきちんと考えていかないといけないのかなと。ただそれが具体的にどうのこうのというのは、今すぐは出ないですが。

石阪部会長：今のお話もそうですが、今おそらく小中学校はコミュニティ教育をやっていますよね。公立の場合、地域の人たちと一緒にあったり、あるいは地域のものを見たりとかあると思うのですが、これに例えば高校生や大学生も、足立区の地元のことを学ぶとか、地元の人たちと交流をするような機会を増やして行って、そうした人たちが近い将来コミュニティやまちづくりに参加出来るような素地を作っておくことが大事だと思います。今までそれぞれ独立していて、なかなかコミュニティと一緒にやってやる機会がなかったと思うのですが、例えば10年後や20年後を考えた時に、学校は単に先生が子どもたちに教える場ではなくて、地域の人たちが、あるいは地域で活躍している人たちと教育を接合させるような仕掛け。

たがた委員：だからそこを相対的に考えると、今、日暮里舎人ライナー沿線に結構若い方が入ってきていて、なかなか町会に加入していただけない。だから子どもたちもなかなかそちらに行かないということがあると思います。

石阪部会長：どちらが先かみたいなことはよくありますが、難しいです。だから親の問題がかなり大きいです。ただ若いところからコミュニティに対して親近感を持つなり、あるいは一緒にやるなりという仕掛けづくりは今後必要になってくるだろうと。

あとは若い人が安心してそこに住みたいとまちになるかという意味で非常に面白いと思ったのは、低所得でも豊かに住めるまちと書いてあるのですが、これ結構議会では出てくると思うのですが。あまりお金とか収入にこだわって生きるのではなくて、それ以外のところで豊かさを見つけて、足立というのはそうした部分でアピールするというのは、方向性として非常に面白いと思うのですが。皆さん、低所得でも豊かに住めるというのは一見矛盾しているようにも見えるのですが、個人的には面白いと思ったのですがどうでしょうか。足立というと低所得とかネガティブなイメージがつきまといますが、それをポジティブにしておもうという発想ですね。

小久保委員：自分でも思っていたのですが、どのような方向にあるべきかと、まずは暮らしやすい足立というのにするためには、安心ですね。それから安全。これ治安の問題ですね。前は安心・安全で、逃げなくても安心して住めるまちにしてくださいと。これは障がい者の側から見たことで意見を言ったことがあるのですが、確かにそうしたことで。あとは三つ目に挙がってくるのが、経済的に安いコストで暮らせる。だからここにまさしく書いてある低所得者でも。

石阪部会長：それはよいですね。結構偉い人たちで話すと隠そうとするのですが、僕は開き直ってこれだからこのまちは逆にすごいのだと。だから低所得は別にして、例えば経済的にそんなにコストを掛けなくても豊かな暮らしが出来る。これ実際にそうなのですか。

小久保委員：2～3日前にテレビでやっていましたが、ああいうふうに安いところってたくさんあるんですね。ですから、そうしたことが住民に浸透というとおかしいですが、そうすればかなり足立って身近で住みやすいんだなというイメージを生むと思います。

石阪部会長：そういった意味では新宿や六本木を目指すわけではなくて、足立らしさみたいなものにこだわるとというのが今回必要だと思います。

鈴木委員：先ほどの低所得の部分ですが、以前にいただいた資料でも、住みよいまちの項目の中に物価が安いという項目が入っていますし、そういったよいところもたく

さんあるわけですから、生涯にわたって健康的で活躍出来るまち。年を取っても小遣い程度かもしれないのですが、所得が得られるような枠組みが出来ると、もっと楽しい将来になる気がします。

石阪部会長：もっと言えば、楽しく老後を送れるまちですね。そんなにお金がたくさん入ってこなくても、ちょっとした年金プラスアルファぐらいでいろいろな楽しみが出来たり、人との交流があったり、ここで老後を過ごすことが楽しいというそんなイメージですね。大塚さんはいかがですか。

大塚委員：足立区に人口が増えているというのは、一つには家賃が安いということによって20代が増えているのだと推測するのですが。そうすると、30代、40代、50代になって社会的に成功してくると、逆に足立区から出ていくという可能性が高いと思います。だから出ていく前に足立区の魅力をどんどん高めていかないととどまらないと思います。

石阪部会長：成功すると出ていくので、成功しても住んでもらえるまちですね。僕もそれは賛成で、やはりそこにある独特の楽しみ、もっと言えば文化とか、土地としての固有性というのがあって、人はそこに住みたいのだと思います。どこでも一緒ならより利便性の高い、それこそ山手線の中にみんな流れていって、お金がたくさん掛かるけれども、でもそうではなくて、足立はそれなりに魅力があるという、それは面白いですね。出ていってしまうのですね、足立を。出ていかないまち。益留さん、いかがですか。

益留委員：私は子どもから高齢者まで関わり合いがあるまちが将来像として非常に魅力的だと思っていて、高齢者同士、子ども同士、若者同士ではなくて、すべての世代が顔を合わせてあいさつをする機会がこれから増えると思うなと思っていて。そうすれば、新たなコミュニティも縦のつながりが出来ると思うし、高齢者も住みよいまち。若者に支えられたりして、住みよいまちになると思うし。あとは子どもと若者も高齢者と関わることでマナーの向上にもつながると思っていて。例えば前回も出たのですが、スポーツチームを一つ区を挙げて応援することで、子どもも応援するし、高齢者、30年後の高齢者の方たちも今の高齢者の方たちも、スポーツチームと一緒に応援することで顔を合わせる機会が増えるだろうし。あとは一つこれは現実にはないかもしれないのですが考えたことが、商業施設に今の商店街のお店を入れて、商業施設の中に商店街があると面白いかなと思っていて。その中に、今若者が行くようなお店もいくつか入れると、若者がそのお店を求めていったとしても、途中歩いている中で、こんな面白いお店が今まで商店街にあったのだとか、こんなお店知らなかったなと知る機会が、一緒に商業施設に入れることで出来るかなと思っていて、現実的ではないかもしれないのですが、私はそれがあったら非常に面白いなと思いました。

石阪部会長：まず、最初の世代がいろいろ交流出来ること。そのためには単なる仕掛けが何もなく、では一緒にやりましょうと言ってもなかなか交流はしないので、今言った例えばシンボリックなもの。例えばみんなで応援が出来るスポーツチームとか、あるいはそれこそ老いも若きも問わず、いろいろみんなで一つになれるような、何かシンボリックなものを足立区で作っていかないとかなり厳しいですよ。

今、それこそサッカーとかバレーボールでも何でもよいですが、スポーツは一つそのきっかけにはなるかもしれない。オール足立という一つの態勢を作る上で。地方は結構やっています。スポーツ観光であったり、スポーツによるまちづくりをかなり盛んにやっているので、23区だとあまり聞かないのではないのでしょうか。スポーツチームを誘致するというのは聞かないのですが。それこそ前回だって、大学や病院を誘致すると言って実現したわけですから、やってやれなくはないわけです。もし足立区で何かこれといったシンボリックなスポーツを一つ誘致するなり、あるいは子どもたちまで含めてみんなでそれに親しんで、かつ応援が出来るようなものがあると、世代間がつながるきっかけにはなると思います。

ただ、競技場とかはどうでしたでしょうか。

おぐら委員：舎人公園だとか東京武道館だとか。

石阪部会長：都の施設ですけど使えなくはないですよ。

おぐら委員：陸上競技場と野球場があります。

たがた委員：私、以前札幌市役所に別件で視察に行ったことがあったのですが、その時にたまたま北海道日本ハムファイターズが札幌に来たということで、札幌で何か最近替わったことはありますかと聞いたら、一体感が生まれたと。なぜか。やはり日本ハムが来たことによって、小さいお子さんとか高齢者まで、すべてが日本ハム一本になったということで非常にまちが盛り上がったということで、よい話だなと思いました。

馬場委員：もちろんプロ野球球団が来るぐらいの大きな出来事があれば一体感が生まれると思いますが、そこまで行かなくても、足立区は舎人公園に陸上競技場があります。これは都の施設ですが、ありがたいことに東京23区の中で陸上競技場のある区は実は非常に少なく、隣の荒川区にはありませんし、ない区の方が圧倒的に多いです。そこで定期的にでよいのですが、プロの試合を、サッカーの試合でも、この時期には必ずJリーグのサッカーの試合があるよということであれば、それはそれでこの時期は足立区全部で応援しよう。スポーツってそうしたノリを喚起出来る非常にありがたいものですから、それは利用出来るチャンスがありますので持っていく方次第

だと思います。

石阪部会長：産業としての裾野も広がりますね。例えばグッズを作るとか。足立区は中小企業が多いですから、バッジを作ったりタオルを作ったり、さまざまなものを作れば地元の産業にも波及するので。あとは何を持ってくるかとか、現実的な問題はまた先の話ですが、そういった提案が出たというのは一つ、足立区が一体感を持つということで、そのための何かシンボリックなものを誘致すると言うか、それを作り上げるということでしょうか。それが必要かもしれないですね。

何か足立区は地区別に見ると、バラバラ感が非常に強くて。例えば千住は千住だし、千住の人から見れば川の向こうは違うニュアンスで語られるようですし。多分住んでいる地域によっても、一緒にされたくないという思いもどこかにあるのかもしれないし。何かオール足立の態勢になかなかかなりづらい。それだけ広くて人が多いということで、これが今まで強みではなく弱みに逆になっていた面もあるのではないのでしょうか。おらがまち意識みたいなものはみんな強いんだけど、足立区民であることにあまりプライドを持ち得ない区民が多かったのではないのでしょうか。そういった意味では、一体感というのは僕は大事だと思います。東西南北、新住民もそうだし、元から住んでいる方もそうですが、今までそれがバラバラで、政策の打ち方もそうした意味では対処療法的でしたね。何かが上がってくればそこに支援をするという。そうではなくて、足立区という将来を見据えて、オール足立の態勢を作る。そのためにはまずは足立区として一体感を作っていく。

これは先ほどの発信にもつながってきますね。イメージの。逆にバラバラだからこそネガティブなイメージが広がりやすいのかもしれませんが。ある特定のネガティブな地域だけが取り上げられて、なぜかそれが足立区の代表みたいに語られて、区全体が駄目でしょうみたいな。だから、そうならないように、足立はこれだけ盛り上がっているよという仕掛けが必要だというのは、多分若い人から見ても何か物足りないところもあるかもしれませんね。

益留委員：これは外からの人を呼ぶことにもつながるのかなと思うのですが、私が実際にそうなのですけど。もともと栃木に住んでいたのが、父親がラグビーをやっていたこともあって、府中市に引っ越してきた後に、府中市にはラグビーがサントリーと東芝があって、非常に推しているのですが、そこで私もラグビーをよく知るようになって、もともと違う地域に住んでいたけど、その地域にラグビーを通して関わるようになって府中市が非常に大好きになったし。そうした意味で一つスポーツがあると、そのスポーツを好きな人が外から来てくれるかもしれないという可能性はあると思います。

石阪部会長：これ結構トップの考え方があると思います。近藤区長はスポーツ好きですか。

馬場委員：どちらかというと好きではないです。

小久保委員：ラジオ体操には来ていますね。

石阪部会長：これはトップで好きな人がたまにいます。そこはやはり誘致したがる傾向が強いし、スタジアムを作ったり結構熱心にやる方がいます。若い人からそういった声があるということは、僕は結構大事なことだと思います。出来るか出来ないかは別にして、プロスポーツというのは波及効果がある反面で、いろいろな問題が逆に出てくるということもあって。例えばスポンサーの問題だとか。逆にそれが傾いてくると、それを区が支えるということになると、場合によってはお金を出してという話になると、こんなはずではなかったということもよく聞きます。結局尻ぬぐいはうちの区がやらなければいけないのかみたいな。だからその辺は慎重にやっていただきたいところはあるんですが、ただもっとシンボリックな別なものでもよいのですが。

小久保委員：いろいろな世代、それから男も女もと考えると、やはりイベントだと思います。祭りですね。それでかつては、先ほど盆踊りの話もありましたが、足立音頭という歌があったのです。今は聞いたことがないです。それで最初の足立音頭というのは、名称がいろいろ入っていたのです。千住新橋だとかお化け煙突は違うかもしれませんが。歌詞の中に入っていたのです。それを各町会で踊ったり歌ったり。

石阪部会長：ご存じの方はいますか。

地域のちから推進部絆づくり担当課長：足立音頭って確かにあります。

小久保委員：今あるのはその2代目なのです。で、そのもっと古いやつは千住節というのがあります。だからそういったことを取り上げてですね。どこか人が集まるような通りでイベントをやれば、いろいろな人が集まれるし、参加の範囲も広がるしですね。

石阪部会長：音頭というと盆踊りのイメージですが、よさこいなどは若い子もやりますから、それで例えば音頭をモチーフに歌を作ってみたり、みんなでお祭りに向けて一体感が出来るようなものですね。例えば応援歌でもよいし、何か足立の一体感を作るような仕掛けとなる祭りや音頭や歌ですね。キャラクターはいますものね。少し増えすぎて困ったという面が足立区はあるようですが。そのような一体感、それから若いも若きも男も女もというところですね。

おぐら委員：先ほどの議論と、今皆さんからの意見とかなり似通ったところがあるの

ですが、私がこの理想像としているところというのは、あらゆる世代も違う、価値観も違うところで、学生・主婦・高齢者・障がい者・自営業者・サラリーマン・若者・子育て世代・子ども、そういったいろいろな人たちが特に価値観が多様化していく中で、そういった違いを認め合って多様性を包摂していくようなそうしたまちというのを、お互いの違いを認識していく。考え方は違っても、それぞれちゃんと認め合っていくというようなものを理想としています。

ただ、生活スタイルもすべて違う人たちがどのようにして関わっていくのかというのがなかなか答えが見つからないところで、先ほどあったスポーツというのも一つのキーワードだと思いますし、何かまち全体、お祭りもそうですが、一体感が出るような何か世代が違う人たちが交わるものの仕掛けが必要だと思います。

低所得でも豊かに住めるまちというのが、まさに価値観も世代が違う人たちが関わっていく中で、低所得でもお互いに補い合ったり助け合ったり、何かあった時に相談が出来るとか、世話をしてもらったり、そういったものもそれは近所であって、別々に住んでいる人たちでも知り合う中での関係で出来てくることが理想だと思っています。

まず、基本は隣近所、地域の町会とか既存のコミュニティはもちろん大切ですが、またそれ以外にも趣味・ボランティア・NPOなど出入り自由な、がんじがらめのコミュニティではなくて、緩やかなつながりというのも第3の道として一つあってよいのではないかと思います。どうしても既存のコミュニティをいかに大きくしていくか、また維持していくかというところの議論になりがちですが、僕はどちらかというとネットワーク的にいろいろなものがいっぱいあって、それぞれがお互いにちょこちょこ普段時には関わり、時には全く別々にやっていくようなアメーバ型イメージのつながりが、地域やテーマを超えたもので出来れば一番理想だと思います。

では具体的にどうすればよいのかというのはなかなか難しいところで、今皆さんからいただいたアイデア・意見は非常によいなと思います。

石阪部会長：そうした意味では、今までの既存の縦割りの地域ごとのものではなくて、いろいろなところでつながるような仕掛けを作っていないと難しいです。だから今NPOがいろいろ頑張っているんですが、それでも登録団体はまだそんなに多くない気がします、人口規模の割には。だからまだまだ素地はいっぱいあると思います。それがまだネットワーク化されていないという、足立の場合はそれぞれがそれぞれの活動で終わっていて、学生もそうですよね。学内のサークルで終わってしまっていて、それが地域とつながっていないとか。

おぐら委員：特定のテーマや地域だとか、同一のグループの中でというのはいろいろなところでいっぱいやっていると思います。そこをもう少し発展してやっていくというのは、それぞれの全く違うところからのつながりだったり関わりだったりというのは、非常にこれから有効に発展していくのではないかと思います。

あとは全く違うのですが、一つあるのではないかと思うのは街コンが結構はやっていますよね。西新井大師でもやったりして、今まで関わりがなかった人たちが関わってまちを盛り上げて、また違った人たちが交流をして顔を突き合わせて1杯やりながら楽しくやっているというああいうことなども、実は何か足立区のまちの発展にもつながってくる、いろいろな大きなヒントがあるのではないかと思います。全く新しい形でしたので、ああいうのはヒントになると思います。

石阪部会長：本当は地元で育つとよいのですが、そうしたことをやる人たちが。今はよそから結構プロが来て、街コンを開催するケースが多いですが、地域でお店が中心にまちを盛り上げていこうとか、地元で街コンが開催される形になると面白いですね。そうした意味では、今まであるさまざまな活動をつなげていく。補助金でもよいと思います。2グループ、3グループがくっついたら補助金を出すとか。単独では出さないが、三つ一緒に何かやるとなったら、少し何かインセンティブを付けて区として支援するなどというのも非常に面白いと思います。そうするとみんなくっつかなければいけないと、そうした動きにもつながるのではないかと思います。

馬場委員：お祭りの話が出ましたので一つ、足立区が他に誇れるイベントで、やはり足立の花火を入れなければいけないと思っていました。ずいぶん意欲的になってきました。この首都圏で一番初めに7月のいわゆる花火シーズンのトップを切ってということでマスコミの注目も上がってきましたし。花火を上げられる区がやはり限られていますよね。上げるスペースがある区は足立区がナンバーワンで、足立区は地図を見れば分かるのですが、荒川の河川敷が両側が使えるという。よその区は片側しか使えなかったりする区ばかりなのですが。それが要するに河川敷が非常に広大にあるということで、すばらしいコミュニティを作れるというか、無料であれだけの花火が見やすいということですね。打ち上げの数は隅田川の方が多いのですが、見やすさという点からすると、河川敷で見られるというのは隅田川にない大きな魅力だったりしていますからそれも一つです。あとは春に舎人公園で花火を打ち上げるのですが、春の花火というのも他になくてですね。バリアフリーで車いすでもすぐ会場に行けるということで、舎人ライナーもバリアフリー対応ですから、非常にお年寄りにも優しい花火になっていますし、桜の花もたくさん咲いているということで、一つひとつに光を当てるとすばらしくよい素材と言うか、イベントはありますから、これがもう少し他区に分かるような形で発信出来ればと思っています。

石阪部会長：そういった意味では足立区が持っている資源はいろいろあって、例えば一つは川ですし、河川敷もそうだし、舎人公園もそうなのですが、やはりそれは中にコミュニティ再生とかコミュニティの絆づくりだけではなくて、それで人が呼べるという、観光とか地域経済の発展にも結び付く潜在力があるわけです。そういった意味ではそのようなものを使って、出来れば他区と連携するとか。例えば川なんていうの

はよく流域探訪と言って、足立区だけではなくて、墨田区とか江東区とかが川沿いでつながって何か一緒にやってみるとか。あるいは花火であっても、よそからいっぱい人が来るので、この際いろいろなPRをしてみるとか。おそらくやっているとは思いますが、もっといろいろな仕掛けが打てると思うのです。これから東京オリンピックとかいわゆる観光と言うとあれですが、よそから人が来る機会が増えてくるので、そういった人たちが足立区に来て、ああ、いいなと。浅草までしか来る予定はなかったけど、もう少し北まで行ってみたらこんなことが東京にあるんだみたいな、そのようなまちというのもこのくらし部会で一つ、他の人たちがあこがれるような仕掛けが必要かもしれないですね。

もう一つ大きなテーマであった生涯にわたって健康でいきいきと活躍が出来る。皆さんからかなり高齢者にとっての健康づくりだったり、福祉、この辺を充実させた方がよいという声が前は多かったのですが、この辺はいかがでしょうか。高齢者という言葉を入れてしまって、高齢者にとって住みやすいまちというのは一つの考え方ですがどうでしょうか。

大塚委員：健康づくりというのは高齢者に限らず全部だと思います。特に若い人や障がい者団体の方もいらっしゃるんですが、障がい者というのは、身体障がい・知的障がい・精神障がいとありますね。そのうち精神障がいはかなり最近増えている気がします。そうすると、精神障がいは若い人もなっていると思うので、ですからまずは心の健康ですね。その視点も一つ入れるとよいと思います。

石阪部会長：むしろ高齢者福祉だけではなくて、広く取っていろいろな方がいるので、そのような方が本当にいろんな面で健康で、心が安らぐと言うか、そういったことかなという気がします。そうした意味では、別に高齢者だけではないですね。健康でいきいきと暮らすというのは。だから足立区が例えば高齢者がいきいき暮らせるまちにしてみると、では若者はみたいな話になってきますし。そのような意味ではこのような書き方がよいのでしょうか。生涯にわたって健康でいきいきとか。あえて主語を入れずにみんなとしてしまうやり方もよいという気がしますし。反面、もう少ししっかりと、足立区はここにこの30年力を入れていきますよというメッセージを出すのも一つの考え方ですね。

小久保さんいかがですか。これはどこの自治体にも入ってくるという気はしますが、ただ足立区らしさという意味で言えば、どのような形でこれを表現するかですね。

小久保委員：これは足立だけということになると、かえって難しいのですよ。例えば車いすの人で、代々木上原に住んでいた方がいて、その方がもう5年から6年ぐらいになると思うのですが、足立に越してきたのです。で、会った時に何を言うかなと思ったら、最初に足立ってよいなと言ってくれたのです。え？ って自分では気が付かないものですから、何がよいのですかと言ったら、坂がないと。足立区は平らだと言

ってくれたのでね、ああ、なるほどと。そういえば坂がないですよ。ですから、障がい者で限定ということになると、非常に難しいです。

石阪部会長：地形自体が優しいまちですね。

小久保委員：意外に昔から世話好きって言うのですかね。

石阪部会長：困っている人がいると手を貸してくれる。そういった何か人の良さだったり、助け合いの精神みたいなところがやはり根付いているということです。だからそうした意味ではいわゆる弱者と呼ばれる人たちにとっても、優しいまちであってほしいという思いはおそらく区民の皆さんもお持ちだと思います。いわゆる経済的に豊かだったり、都会の先端でいろいろなものがいっぱい入ってきてすごいというまちではなくて、むしろ人情味があって、経済効率優先ばかりではなくて、むしろ人の良さや面倒見を大事に出来るような、そのようなまちですかね。二者択一ではないですが。

小久保委員：結構だから古い人たちのところのまちというのは、意外にそういったものが強いのです。逆に新しく大型のマンションとか団地とか、こうしたものが出来るとなかなか難しいのです。私のところは足立の1丁目ですが、公団の150世帯ぐらいの大きいものが出来たのです。町会の方でも誘致に失敗しまして、加入をされているかたはその中の2割ぐらいですかね。ですからどのようにうまく、古い人と新しい人が融合してくれるかなということだと思います。

石阪部会長：あとはここに書いてある健康寿命が短いということに対してですが、長生き出来るまちということと言うと今は生きられないわけです。そう考えると、それも一つのメッセージとしては面白いです。足立区が何を言っているんだみたいな。けれども、足立区に来ると例えば生涯にわたって健康でいきいきと長生き出来るまちみたいな、おそらく30年後の健康寿命を見た時に23区でトップだとかですね。そんなある意味では一番下から一番上に行くようなイメージの転換があっても面白いのではないかと思います。そういった意味ではいろいろな取り組みを今されていますよね、足立区では。だからそれをもっとPRするのもよいのではないかと思います。この辺はどうでしょうか。

馬場委員：平均寿命の2歳というのはすごい差だと思います。それにはそれなりの理由があるということだと思います。もちろん長く生きられればそれに越したことはないとは思いますが、僕はどちらかというと中身をどのようにするかという方で足立区は特徴を出すべきだと思っています。足立区の健康づくりと言うか、足立区の特徴はという先ほどもお話がありましたが、障がい者の施設がたくさんあるというのは、足立区の一つの特徴だと思います。特別支援学校も四つありますし、目の不自由な方の

学校とか、いろいろな学校に通いやすいのが足立区だというのが特徴です。

そう考えてみると、体に障がいがある方がたくさんいるということは、その分もしかしたら寿命も短いのかなという気もするのです、健常な方よりは。ですから、たくさんそういった障がいのある方が多いということは、それぞれの学校、それぞれの施設でこれまたお祭りをやったりしていますから、そのお祭りを支えているのは結構地域の町会とかまた一つのコミュニティがありまして。で、そのコミュニティの中でなぜボランティアをやっているのと聞きますと、やはり近くにそういった障がい者の施設があると応援したくなると言いますね。自分が健康に生まれたことに感謝すると共に、やはり自らの意思で不自由で生まれてきたわけではないのですから、そういった方を助けたいという輪が結構中学生とか高校生とか若い人にも広げられる環境があるのが足立区なのですね。

この前スポーツ選手が足立区の障がい者施設のお祭りに行った時に、自分がスポーツでけがをしてよい成績を上げられなかった時に、くじけそうになった時にも障がい者の人たちがいきいきと生活をしているのを見て、けがぐらいでくじけちゃいけないとまた復帰出来たなんていう話も聞きました。そういった他区にはないつながりと言うんでしょうか。それを足立区で持てるというのは、一つは売りと言うか、足立区の良さとしてしっかりと出すべきだろうと思っています。

石阪部会長：僕、福祉の問題を考える時に非常に言葉に悩むのは、一つは例えば施設や病院・医療がとても充実したまちと入れてしまうと、それってある意味でそこにお金を掛けますという宣言になりますよね。区として充実させますと。一方健康寿命を延ばすとか、自分自身の健康管理をしっかりとすることになると、医療費の抑制につながる。つまり健康を自分できちんと管理出来るまちであると。だからこれは書き方次第で、どちらも福祉は福祉ですよ。だからどのような書き方をしたら足立区の将来にとってよいのか。医療が充実しています、福祉のまちです。足立はそれを宣言するのか、それとも自分たち自身が自分たちを律して、しっかりと健康に向けて努力をするまち。極端に言えばですが。で、ベクトルがおそらく正反対なのです、同じ福祉をやるにしても。だから足立区として立ち位置はどこに置くかによって、文言が変わると思います。生涯にわたって健康であり続けると言いましてもですね。

たがた委員：この間敬老の日ということで近所に行かせていただいた時に、そこで卒寿だ米寿だ喜寿だというお祝いをやっていたのですが、やはり 90 歳まで生きている方、88 歳まで生きている方、いろいろ聞くと極端な話、全員が全員ではないですが、自分なりに努力していると言うか。日頃少しでも肉を食べようとか、何か努力をしているから 88 歳、90 歳まで伸びているみたいなのです。

足立区も今仕掛けとして、特定健診を受けるとお米がもらえとか、いろいろな形でやって、少しでも検診を受けてもらおうということでやっているのですが、やはり普段健康に気を付けている人は、やはりしっかりと健康管理をやっています。全然意

識がない人に限って、やはり健康に留意されていない部分があるので、最終的にはそこを言えばもうおしまいですが、自分自身の問題であるということなのですが、やはり足立区としてはそれなりに、住区センターでもらくらく体操とか、公園には健康遊具が置いてあったりと。それを使うか使わないかは自分自身の問題であって、使っている人はそれなりの健康を意識している人だと思いますので、その辺で足立区としてはハード的にはある程度はやっているとは思いますが、あとは個人的な意識の問題になると言えばそれまでですが。

石阪部会長：おそらくそうせざるを得ないと思います。何でもかんでも自治体が面倒を見ますという時代では、おそらくもうないですし、これから 30 年を考えた時に、先ほど小倉さんがおっしゃったように選択肢が多いということ。多様な人がいっぱいいるので、その人たちが受けられるサービスが充実しているというのは、それはよいと思います。もともと健康ではない方と健康な方ではサービスの使い方は異なってきますから。そういった意味では、多様な選択肢が用意されることを前提に、やはり健康管理をやるとか、これで言うといきいきと暮らすということをどのようにして自分自身で考えていくかというのは、区民の皆さんが自覚を持ってやってもらうということが必要かもしれません。

だからおそらく足立区としては、その方がよいのではないかと思います。ただ、そこにはやはり多様性であったり、もっと言えば、では病院は作りませんか、福祉施設はいらないということではなく、いろいろなさまざまなニーズ・サービス、これを踏まえた上で最終的には健康においては自己決定・自己管理が大事なのだと。それに もっと気付いてほしいということですよ。例えば糖尿病対策で足立区がやっていることもそうですね。まず、啓発から入って行って、気付きから始まるのですね。このようなことをやっていたら長生きが出来ないみたいなことに気付いて初めて人間は変えていくわけですが、そこの気付きの部分はかなり足立区は力を入れている感じがします。

他にどうでしょうか。今は健康の話が出ましたし、コミュニティの話は冒頭からずっと出ています。あとは若者が出ました。あとは安心・安全も出ました。あとは生活で例えば低所得だったりとか、もともと足立区がかねてより抱えていた課題ですが、これとどのように向き合うかというところを、果たして入れる必要があるのかどうかです。例えば貧困であったり、低所得とか、これはどうなのでしょう。個人的には、低所得でも豊かに住めるというのは、もう少し言い方を変えと、お金が掛からないで暮らせる。そのためにはお金が掛からないというのは、行政がけちっているという意味ではなくて、みんなが協力して、みんながそれを支え合うことによって、所得が低くても他の区よりも豊かな暮らしが出来るのだと。場合によっては、それが人的なサービスとして機能をするという、それが足立区の良さなのだという、おそらくそのようなことですよ。これって一つ、30 年後を目指す姿として非常によいと思います。みんなが協力し合って弱者を支えて行って、で、結果的にはそれで生涯にわたっ

て非常に楽しく豊かに暮らせる、そういったまちになるということです。

それから皆さんに伺いたいのは、例えば産業のところ、農業であったり、中小企業に関わるところ。足立区は今、どちらかというと厳しいと言われている。ここについては、例えば足立区の前向きな活力であったり、前進だとか、そのようなどんどんと大きくなっていくという部分はいらないかなとふと思ったのですが。農業で地産地消と言っても、かなり厳しいのは厳しいと思います。地元産で小松菜とかありますが、それはかなり厳しいだろうと。そうなる中で、どのような活性化策、地域経済の活性化や産業の方針転換があり得るのかという話ですが。ここについてはいかがでしょうか。あまりイメージしづらいですか。30年後に日本経済がどうなっているかというのはなかなか予想しづらいのですが。

僕のイメージだと、足立区発のそれこそ今度ドラマで下町ロケットというものをやりますが、小さな町工場が世界的に有名なロケットを開発していくわけですが、そうしたサクセスストーリーみたいなものが足立区から出てくると、町工場でも技術は持っているのです。足立区の工場はものすごく。拝見するとすごいなと。世界的な技術だなというのが足立区にはいくつもあるのですが、なかなかその辺でイメージがうまく発信出来ていなかったり、先ほどおっしゃったようにある程度の規模になると外に出ていくとか、そのようなこともあると思います。そのあたりをどうやって10年後。やはり難しいでしょうか、行政の将来像に書くというのは。ただ、何か地域経済が活性化して、みんなが地域で元気を取り戻すと言うか、元気な生活が出来るというのは、悪いことではないですね。

あとは、ここにもあるのですが、マナーとか道德のところですね。前回も出ましたね。これは世代間の交流等によって、いろいろなマナーの使い方はあると思うので、道德というのもありますが、いわゆる学校の中の道德教育でやるのはかなり限界があることはあるので、そのようなことだけではないということです。思いやりとか、これはやはりいろいろな人たちと接することによって生まれてくるものでもあるわけですね。多様性を知らなければマナーを獲得する手段がなくなりますから。

それから孤立防止というのも一つありましたね。親世代との同居とも絡みますが。これは今対策をやっていますが、これもある種のコミュニティがそれを下支えして、孤立を防止する。例えば昔のような大家族を今の時代で作れと言っても、なかなか厳しいと思うのです。それこそサザエさんみたいな家族が今どれくらいあるかという、なかなかいない中で、では孤立化した人たち、孤立化しそうな人たちをどのようにしてサポートするかという、やはり地域のネットワークだったり、行政サービスだったりということになる。これもコミュニティの問題ですね。よろしいでしょうか。これは一つ入れておきたいとか、30年後ということではいかがでしょうか。ワーク・ライフ・バランスも前回出ましたね。仕事仕事ではなくて、地域や家庭や子どもたちに目が向くようなそのようなコミュニティづくりと言うのでしょうか。職場づくりと言うのでしょうか。これもどちらかというと新たな地域のあり方にも絡んでくるのでしょうか。

小久保委員：自分で前回発言をした中にスポーツ・文化というのがありますが、これだと意味が取れない気がする。この下に生涯にわたってうんぬんとありますが、生涯学習という言葉はこの上に乗っけて、体育系・スポーツ系から文化教養とかいろいろあるわけですが、そのようにこの上に生涯学習ということで、学習が乗っかるとよいなと。

石阪部会長：この四角の中に生涯学習という文言を入れてもよいですね。この丸の方はどちらかというと学習と入れると。

小久保委員：それは違いますね。

石阪部会長：こちらのスポーツ・文化のところに生涯学習、これは大事ですね。生涯にわたってスポーツや文化に親しめる、そのような環境づくりをするということですね。

ここまで来たところで整理しましょうか。前に出していただいたので、今いろいろ作っていただきました。これを少しまとめていきたいと思います。まず、コミュニティに関わることです。これは皆さんからいろいろいただきました。この辺が結構議論の時間が一番長かったので、皆さんの考えも非常によく分かります。やはり今のコミュニティだけだと孤立が生まれ、学力の低下が生じ、貧困が再生産されるという、これを防止するためには新たなコミュニティ。それがしかも単に地域と地域がくっつくということではなくて、もっとアメーバネットワークのようなつながりが生まれて、しかもいろいろな人たちを受け入れるような、お祭りでも排除の論理ではなくて、それこそ参加や協働の論理で物事が進められるような、そうしたコミュニティがやはり地域の中に出てこない足立区は厳しいと。それをぜひ作るべきだという、これは将来像として一つ入れておきたいと思いますね。そうしたことが世代間の交流につながり、あるいは生涯学習やスポーツの発展にもつながっていくと。それから祭りも、花火等含めて変わっていくと。さらに言えば、コストを掛けなくても豊かに暮らせるということで、ある種の人的サービスなわけです。行政に代わる地域のいろいろな助け合いですね。ただ、行政としてそんなことを書いてもよいのか。助け合いが行政のサービスに変わるのだという、結構大胆なメッセージですが、それが足立区の良さなのだと。ということで、これは大事だと思います。このようなことをあまり行政は言えませんから。

それからもう一点としては、健康のところになるのでしょうか。やはりいきいきと生涯にわたって健康で暮らしていただけるような、そのような仕組みづくり。若い人もそうですし、障がいのある方もそうだし、年配の方ももちろんそうだし、そのような人たちへの何か健康であるまちみたいな。あり続ける。それがその人の豊かさ、幸せに結び付くのだと。足立区に住んで良かった。生涯にわたって健康でいられる。その

ようなまち、それは一つあり得ると思います。そのために必要なものがいろいろ多分あると思います。だからそれを進めていくと。だから若い人などもそうですよね。今ベジタベライフとかやっていますが、野菜を食べなければ駄目だとか、検診は大学でも職場でもやるけれどもそれにちゃんと行こうとか。早期発見につながって、それが医療費の抑制につながるのだという話。そのような意味ではコスト削減にもつながっていくということですね。

それからもう一つあえて柱を出すとすると、足立区の外側に対するメッセージ、足立区のイメージの問題です。先ほど言った一体感を出すということももちろんですが、オール足立という態勢で対外的にアピールをする。まず一つ、内側では自分たちが一つになるような。そしてその一つになった足立区がどんどん情報が世界に向けて発信出来るような、ある意味では23区の中でのまちになったら面白いのではないかな。オール足立の態勢づくりであり、情報発信でありということです。情報発信は、今個別にやってもなかなかうまく行かない場合が多いです。区役所で集約しようと思っても個人の活動まで集約することは出来ない。そのような意味では、先ほど言ったスポーツで一体感を作るというのも一つのアイディアです。それから、例えばお祭りであったり、足立音頭とか歌がありましたね。ああいうものをみんなで作って、足立区の一体感を高め、さらに外に向けてメッセージをすることが出来るということも、やはり皆さんの中では足立区のイメージを変えることが大事なのかなと。

それから産業の面では難しいのでしょうか。魅力や資源の発信です。あとはいかがでしょう。今三つ柱を作りましたが。あと気になるのは、低所得とか貧困のところを足立区として出すかどうか。おそらくですが、子ども部会では出るのではないのでしょうか。どうでしょうか。出そうですよね。ということは、あえてここで出さなくてもと個人的には思ったのですが、子どもの貧困対策というのはあると思いますので。ここはもう一つ何か入れるとしたら、先ほど言ったように地域経済であったり、足立区を元気にするような何かあってもよいのではないかなと思うのですが。

鈴木委員：これがくらしという大枠の中で話をするのですが、外人がだいぶ入ってきている世の中になってきていますので、これから保育とかそういったことも含めて、治安とかそういったものはやっていかなければいけないと思います。それに関して道徳とかマナーとか、そのようなところに延長してくるのかなという部分があります。コミュニティの一環かもしれないのですが、そのような道徳マナーの部分は重要視していかなければいけないのではないかと思います。

石阪部会長：そのような意味では治安の問題とか、安心・安全の問題と併せて、マナー・あいさつであったりとか、きちんと登下校の際の見守りも含めて、しっかり地域の中でやっていくという態勢が取れるかどうか。だからコミュニティにも絡むし、あるいはもっと言えば足立区としての具体的な治安対策や行政施策とも絡む問題ですが、それも大きいのではないのでしょうか。他にいかがでしょうか。

馬場委員：もう一つ話題に出ていた地産地消とか足立の経済に関してですが、これもやはり足立区に住んでいて、中小企業が多くて、そういったところの元気はないかもしれませんが、やはり働き口がたくさん近所にあってほしいと思いますし、現実足立区の小学校・中学校・高校を出て、足立区内に就職して結婚してそのまま足立区で一生を終える人も結構いるという完結型が可能な地域であって、それだけの規模の自治体であるからだとは思いますが。やはり中小企業がしっかりと元気で、雇用という面をしっかりと地域のために強くないと、暮らしやすさにつながらないと思います。以前のような景気がどんどん良くなる時代とは別に、遠距離通勤をしなくても身近なところで働けるということが暮らしやすさの基準になってほしいと思いますから、その点で低所得でも暮らしやすく、物価が安ければそれも足立区の基礎的な中小企業が元気になっていった方がよいと思いますので、しっかりと入れるべきだと思います。

石阪部会長：職住が近接しているということ、これはメリットです。みんな郊外に住んで通って、その分時間とお金を浪費しているわけですから。その点足立区というのは、住んでそこで働くことによって、ある意味ではそういったロスを最小限に抑えることが出来る。これはある意味では先ほど言ったように、お金があまりなくてもそれこそ低所得であっても、豊かな暮らしがということで。確かに通勤は1時間を超えると苦痛になってきます。だからそのような中で足立区に住んで働くという仕組みが出来れば面白いと思います。

それからもう一つ言えば、やはり足立区の中企業の中でキラリと光るものであったり、世界の先端に行くようなものが出てきて、足立区を引っ張ってってもらいたいという思いもありますね。地域経済の活性化という意味でも。ビジネスの世界で10年後を語るのはナンセンスだとよく言われますが、30年後ではどんな産業があるかはっきり分からないのですが、ただ、そのような意味では今から30年前にまさかみんながこうやってスマホを持って話す時代が来るとは誰も思っていなかったと思うのですが。これだけ変わってしまった。そう考えると、何か足立区の中でそういった一つでも二つでも世界に先駆けた新しい産業が出てくるようなことがあると面白いですね。

馬場委員：キラリと光るような先進的なことももちろん必要で、それがあれば非常にそれに伴って産業も大きくなっていくとは思いますが、基本的には地域経済と言うか、勝負するのは足立区だと思います。大企業は絶対に足立区に本社を置かないとよく言っています。要するに優秀な人材を募集する時に、本社が千代田区とか中央区とかって書いていないと、若者にとっての興味と言うか、目に留まらないところがあるようで。それはそれでよいと思うのです。それで足立区が勝負するところではないので。それ以外にも勝負が出来るところはたくさんあるわけですから。物価が安いというのは、例えば我々地方議員は、23区で給料がほとんど同じなのですね。仮に月給

50 万だとすると、目黒区の区会議員は家賃が 20 万掛かって、駐車場代が 3 万だというのです。子どもは夫婦共稼ぎでも 1 人が精いっぱいだというのですが、足立区は家賃は数万円で、駐車場代だって 5,000～6,000 円で済むという、まさに足立区のメリットをしっかりと活かした方が。

石阪部会長：それはどこかに入れましょうか。金が掛からないまちを目指すみたいなのいいですね。多分他の自治体では見たことがないです。このまちはお金が掛からないと宣言している区はなかなかないので。むしろプラスにしようと。何か今までだとね、貧困だとか貧乏だとかネガティブなイメージが付きまとして、先ほど言ったように本社も来てくれないとか。そのような意味では、足立区が一番安いのだと。区議会議員の給料が一緒の中で、一番豊かな暮らしが出来るのは足立区だと。

馬場委員：地方公務員でも基本給はあまり変わらないはずです。

石阪部会長：おそらく 23 区の職員もそうですね。どの区でも一緒の中で、物価が一番安いから、相対的には一番豊かな暮らしが出来るのです。家賃が典型ですけどね。だからそのような意味では、これは P R しない手はないですね。これがすべてを語っていますよね。足立区の良さ。悪さもあるかもしれませんが、良さも含めて。これを 10 年間大事にするというこの感覚ですね。東京 23 区を引っ張るとかではなくて、全然違う立ち位置で、足立区は足立区なのだと。貧困は良くない表現ですが、低所得でも豊かな暮らしが出来るというのは、貧困対策をないがしろにしているわけではなくて、まちの良さを言っているのだということ。そんなに稼がなくてもよいという。それがワーク・ライフ・バランスにもつながるし、それから地域やコミュニティの再生にもつながっていく可能性がある。空いた時間や空いたコストをそちらに振り向けてくださいというメッセージですよ。

おぐら委員：毎年行っている区民アンケート調査でも、実は足立区に住んでみて物価が安いと。意外と家賃が安いと。意外と住みやすいと。治安に関しても、どうしても足立区は治安が悪いイメージがあるのですが、住んでみると意外と治安は悪くないと。とにかく意外とという言葉が付いてくるのですが、住んでみると意外と物価も安いし、家賃も安いし、治安も別に悪くないというのが圧倒的に多いというのが、アンケートの中でもそのような数字がまさに出ているというのが一つです。

石阪部会長：むしろ皆さんのアンケートの結果をここに反映させているということでもあるわけですね。それいいですね。意外と行ける足立区。予想しているイメージとは違うというそのギャップをある意味では将来像の中に盛り込むというのは僕も大賛成です。

おぐら委員：あとはその一方で、貧困の問題は深刻で、足立区は生活保護受給者が約 2 万 6,000 人と 23 区の中でダントツに多いわけで、やはりここに対しては何かしら施策と言うか、理念的なものを打ち出していく。そうは言っても問題と正面から向き合っていく必要があると思います。そこは何かしらやはりキーワードなりフレーズなり、この理念なり言葉の中に、現実をしっかりと打ち出しながら、その一方でこの良さも両方併記でやっていくという観点で何かこう言ったらよいのかということがあればと。

石阪部会長：だから一方では貧困はなくすとか、子どもたちを支援するという軸がありながら、一方では所得が低くても足立区で暮らせるのだという。だから逆に足立区というのは、その両方を解決することが可能なのだという、両方をくっつけることによって、まちとしての魅力が上がっていくという。それも面白いですね。

全体会では、子ども部会の方がどのような議論をしているのか分からないので、貧困対策についておそらく正面からドンと来ると思うので、それにくらしとしてどのように向き合うか、その後の議論でまた整合させていけばよいという気がします。

これはよいのでしょうか。意外に行けると言う、みんな普通にうなずいていますが。普通は怒る人がいそうですが。

少し前に広島県が惜しいとか、香川県でうどんとか、あえて人目を引くようなキャッチフレーズを前面に持ってきて、そのまちをPRするということがありましたが、惜しいは結構ヒットしましたね。広島は惜しいと。トップのレベルには行っていないし、かといってそんな下でもない。惜しい。すべてが惜しい。広島カープも惜しい。そのようなところにあるというのがやはり広島人の心にパッと来るのです。足立区はこれ多分皆さんなるほどと、意外に行けるんだよ、足立区は、ということでストンと来るのです。

僕、逆に区外の人間からすると、大丈夫かなと思ってしまうのですが、それが足立区なら大丈夫だと。それからお金を掛けずに豊かに暮らせるとか、みんな協力し合うというフレーズです。あとは健康になる。これも出ましたね。健康でいられる。それから新たなコミュニティを構築する必要があるだろうと。それから人を受け入れる。これは多様性ですね。多様性を認めて、その人たちと世代間も含めて交流していくことによって、新たなコミュニティの構築につながっていくということでもあると。それから一体感を出していく。足立区の今までのバラバラ感をどのようにして 30 年間で一体感を作りオール足立の態勢を作るのか。それを今度は外向けに発信していく。メッセージとして足立はこうだというね。

今、千住では今度出版社が立ち上がったり、インターネットラジオなどが出てきている中で、例えば千住というのがバーッと発信されていく。足立もオール足立は役所がやっていますし、ただやはり足立全体となると、それぞれやはりいろいろエリアがある。そのエリアの良さはもちろんだし、そのようなことも含めて、いろいろな人が足立区に住んでいるけれども、でも足立区の区民なのだということですね。それで足

立が元気になっていく。一体感を持つことによって、それぞれの地区、足立区も元気になっていく。さらに意外と行ける。この意外とということですね。行けるだけだと、自画自賛しているという話になりますが、足立区だから自虐が通じるというこのようなユーモアも必要なのかなと思います。

ということで、皆さんからご意見をいただきました。どうでしょう。これを3本ないし4本ぐらいにこちら側でまとめさせていただいて、もう一回あるのですね、分科会が。今日は触れられませんでした、プリントの下の基本理念。これがある程度固まってくると、この下に付くわけですね。将来像がイメージされる。その理念となるのは何ですかという、このような理念に基づいてこのような将来像なのだと。理念みたいなものも併せて素案を次回作って、それを提示させていただいて、最終的に全体会に上げることにしたいと思います。どうでしょう。いったんこれは持ち帰らせていただいて、皆さんから出た意見をまとめさせていただきます。で、何本かに絞って、次回改めてこの将来像と基本理念を確定するというところでどうでしょうか。

大体見えてきましたね。皆さんの共通するものが。ただ、もう少し例えば個別でこのようなところが気になるとか、そうしたことがあったならば、もし今時間があれば、触れたかったことも多分あると思います。言いたかったけれどもあまり出てこなかったこととか、いかがですか。

前回結構出ましたし、それを補足する形で今回結構出てきたと思うのですがよろしいでしょうか。

大塚委員：一つ具体的なことですが、ごみ集積所の問題があります。結構隣近所でトラブルになることもあるのですが、それをうまく活かすと新しいコミュニティの発端になると思っています。

石阪部会長：そこは結構難しいですね。これ自治体によっては集積所をなくしているところも結構あります。家の前に自分で袋を置いてそれを回収していくということですね。あるいは集積所の当番を置いて、変なものを持ってきたら突き返すことをやったり、こうしたトラブルはどこでもあります。

大塚委員：逆にやればコミュニティの場にも。

石阪部会長：ここは環境もあるのでしたっけ。ごみ問題はなくてよいですね。

基本構想担当課長：オーバーラップしても大丈夫です。

石阪部会長：環境問題も足立区は結構ごみはやっている方なのですが。それでももしあれば、多分まちづくりの方で議論されていると思いますが。

おぐら委員：1回目の過去の資料を引っ張り出してみたら、専門部会の設置についてということで、くらし専門部会の主な関連分野の中に高齢者福祉・障がい者福祉・健康づくり・絆づくり。ここについては皆さんから意見が出たと思うのですが、生涯学習と産業という部分であまり議論が出なかったのではないかと思いますので、今のうちにたたき台で挙げればより深められるのではないかと思います。

石阪部会長：産業の話は少し出ましたが、農業分野は地産地消もありました。中小企業は今ある地場産業を何とか温かく見守って、その中でしっかりと地に足の付いた足立区の地域経済を作っていこうという、そのようなことが一つありました。

それからもう一つ生涯学習については、これはどちらかというとここにつながるわけです。健康でいられるということにもつながっていて、それこそ生涯学習の定義上は一応大学生ではなく、それを卒業して社会人になってから、ここになるまでの間に学ぶ学習ということになるのですが。いわゆる働いていても家庭にいても学べる。そうした環境を作っていこうと。先ほどのスポーツもそうです。健康でいられるために生涯スポーツをやっていこうとか。それから学習ももちろんそうです。それに関わる文化施設や芸術、そうしたこともおそらく必要になってくると思います。確か前回、今の基本構想の中には文化力という言葉があったような気がします。文化を充実させるのだというメッセージが確かありました。今回特に文化という大きなところは出てこなかったのですが、メンバーにもよります。文化が好きな人っています。芸術や文化を何とかという。それはまた別の部署なのでしょうか。

だから、またもし出ればそうした話でもよいですが。東京芸大がまだ当時は入ってきていなかったのですかね。その時にやはり足立区ってそういえば独自の文化を育てるという仕組みがないよねという議論があったのではないかと思います。で、芸大を誘致したことによってお金をたくさん区は付けましたけれども、それによってさまざまな地域に文化が。特に芸術の分野で入って行って、音楽を中心に、芸大が入って格調が上がったのではないかというところがあって。一方で、庶民やもともとあった下町文化みたいなものを育てていくこともあったと思います。そうした意味では千住で今いろいろなものが発信されていますが、それも一つの流れです。

おぐら委員：特に今見当たらないのですが。

石阪部会長：産業なので、何かこのようなものが将来入ってくるとよいなみたいなものがあるとよいのですが。このようなものを誘致したいとか。前回は明らかにあったのです。大学を誘致したいという。

たがた委員：おそらく芸大もあって、あとは区役所の上に天空劇場がありまして、丸井が出来てシアター1010があるということで、その辺の施設が出来たことによって、小中学校の芸術文化とか、そこから入るとか。

石阪部会長：10年前はそんな議論があったのではないのでしょうか。おそらくその年のトレンドというのがあると思います。今は東京オリンピックを控えているとか、大学誘致がある程度見通しが付いて、病院も入ってくることになって、次のステージへと。そうすると、今度は足立区の今の課題である健康寿命の問題であったり、貧困の問題が出てきていてこのような形になってきたと。

おぐら委員：産業に関連して、今足立区では既に大学との連携で、いろいろなコラボした産学官の連携の企画をやっているのですが、今後も引き続きその発展での産業に育成につながった都心の大規模なものとは全く違った、新しい足立発のいろいろな新しいものの発信の地としての産業発展育成、ベンチャー的なものの活性化としての位置付けというのも一つぜひ加えて。今既にやっているところもありますが、今後の30年に向けて出来れば一番よいのではないかと思います。

石阪部会長：前は大学は誘致をする段階でしたが、今度は大学が出来て一緒に発展していくというプロセスになりましたから、そうした意味では産学官の連携ですね。これが地域経済に対してもそうだし、あるいは人材育成にもつながってくると思うのですが、それに発展して次のステージに行ってほしいというのも、産業としては一つ入りたいです。これだけ大学が入ってきて、それをむしろ区として活用していくということで、産業の発展、人材育成にもつなげていくというのは確かに必要かもしれません。

それではちょうど時間になりましたので、一応これでまとめさせてもらって、最後3回目の議論を進めて、最終的に将来像と基本理念をまとめていきたいと思います。よろしいでしょうか。それでは本日はこれで終了します。

4 事務連絡

基本構想担当課長：次回の開催についてご連絡します。10月26日の月曜日、午前10時から12時です。会場は本日と同じです。なお、もしもご欠席となる場合には、これまでと同様にご連絡をいただければ幸いです。本日は誠にありがとうございました。なおお車でお越しの方は出口付近の担当係員までその旨お伝えください。お忘れ物のないようにお気を付けてお帰りください。ありがとうございました。

午前12時00分 閉会